



平成24年10月1日

卓話 『オードリー・ヘップバーンさんの素顔
～私が彼女から学んだこと～』

コーディネーター

加藤 タキ 様

皆様はじめまして。本日はオードリー・ヘップバーンさんのお話をさせていただきたいと思います。オードリーさんと初めて出会ったのは1971年。当時、私はコマースシャルのコーディネートをしていた、東洋紡さんのコマースシャルキャラクターとして彼女に出させていただいたのが最初です。ローマのご自宅は蔦の這った素晴らしいアパートメントの一角で大きな木の扉があり、オードリーさん自身があの笑顔で迎えてくださいました。

自己紹介を兼ねて名刺を差し上げたら、一人ひとり名前を読み上げてくれて、それだけでもうれしいのに、打ち合わせが始まったらもう名前を呼んでくださる。私は感動しました。あとで伺ったら、これから2週間みんなでお仕事をするのだから当然でしょって言われて、彼女のプロフェッショナルな姿勢を拝見した気がします。お茶の時間、彼女は銀のトレイにコーヒーと紅茶を両方準備して、一人ひとり希望を聞いて淹れてくださいました。これぞもてなしの心です。

驚いたのは翌日、衣装合わせに伺ったとき、居間にはすでにブティックのごとお洋服が並べてあって、例えばこの服だったらこのスカーフが似合うんじゃないかとスカーフが巻いてある。この絵コンテに似合うのはこの衣装ではないかと自分で準備してくださった。細やかな心使いにまた学ばせていただきました。打ち合わせのあと、またお茶を下さって、これはもう感動です。昨日、どのスタッフが何を飲んで砂糖をいくつ入れたかも覚えているんです。オードリーさんのためなら何でもしちゃおうという気になりました。

彼女が59歳のとき、自ら申し出てユニセフの大使をお引き受けになったそうです。彼女の家は戦争の時、大変貧しくて、ある団体が食べ物を配ってくれて、それでどんなに救われたか知れないとい

うお話を伺ったことがあります。彼女がユニセフの大使として日本に来られて国技館でスピーチされた後、彼女は私と二人、パーティー会場の隅っこにいて、寂しそうな表情をなさっていました。「今テーブルに出ている料理を、その食べ残しでもいいからバングラディッシュに持って行きたい。そこでは小さな子どもたちが、私が戦争時代に味わったのと同じ体験をしている。そして1日1個のコッペパンの配給なのに、私が行くとそのパンを持って寄って来て、半分ちぎって素敵なお笑顔で私にくれるのよ。先進国ではどこの国もみんなああやって食べ物を残している。私はそれが残念でならない」という話をされていました。

彼女は晩年、よく子供たちに1つの詩を朗読したそうです。それは彼女の本にも書いてあって、最後の1行がとても印象に残っています。それは「人間は誰も2つの手を持っている。1つは自分を生きるため。もう1つは他の誰かのお役に立つため」。そのもう1つの手を活用して活動していらっしゃる皆様方にオードリーさんのお話をする機会をいただき、とても嬉しく思っております。ありがとうございました。

